

書評

医療管理

病院のあり方を原点からひもとく

医療管理

病院のあり方を原点からひもとく

池上 直己

病院が進むべき道を決めるための
地図とコンパス

医療を取り巻く環境の変化が激しさを増す中からこそ、
絶えず改革される制度に翻弄されることのない医療と病院の管理が求められる。
医療の豊富な知識をひもとき、より的確な経営判断に結び付けるために、
病院マネジメントに携わる方々の必読書。

医学書院

- 著 池上直己
- 定価 3200 円＋税
- 発行 医学書院

評者

聖路加国際大学名誉教授
井部俊子

病院管理にコミットする
看護管理者の必読書病院サービス全体に貢献し、
病院管理の中枢に乗り出す看護師

わが国の看護職の62.6%（2016年時点）は病院で仕事をしている。しかも昨今の病院組織では「看護部」に属さない看護師が増えつつある。看護師が医療安全管理者として活躍する、人事課で採用活動を担う、医事課で患者対応にあたる、経営管理室でデータ分析をする、地域連携室を動かすなど、看護師の活動範囲は拡大している。看護師は看護部長のもとで統率される時代は終わり、病院サービス全体に貢献している。よい病院こそ、こうした傾向が強まっていると感じる。

いずれにしても、病院の中で最大の職種である看護職は、看護を通して「医療管理」を担っている。現場では経営方針が分からず困惑したり、医師と衝突したり、チームが機能せず硬直したりして投げ出したくなることもあるが、看護師は確実に看護管理から病院管理の中枢に乗り出している。

「病院のあり方を原点からひもとく」
入門書

そうした時代だからこそ本書が役に立つ。著者は医療の特異性として、医師の裁量権と専門職としての医師の課題を説明し、「医師は専門職として経済的な制約を直視してこなかったこと」を指摘する。そして経済学の効率性をタスク・シフティングの視点で論じる。効率性の追求は、医師同士の分業によってではなく、医師よりも人件費の低い職種に業務を移すことによって行われるが、医師の裁量権を侵し、報酬の低下につながる可能性のある分野については、医師は反対するのだと。著者は特定行為に係る看護師の研修制度をタスク・シフティングの一環として捉え、制度には肯定的である。

さらに、医療の特異性として、医療職の報酬と支払い方式との関連を説き、包括報酬の導入としてDPC/PDPS（Diagnosis Procedure Combination/Per Diem Payment System）について概説する。

本書では、病院の歴史、病院の経営改革、人事管理、財務管理、病床機能と医療連携をテーマとして扱い、最終章にこれらを統合した応用編として高橋病院のケーススタディがある。

まさに、「病院のあり方を原点からひもとく」入門書として、病院管理を知り、看護管理を実践する看護管理者には必読書であろう。